

日本語学習者による文字表記の誤用と音声知覚の関連性

本橋 美樹

要旨

学習者が日本語の音声をどのように知覚しているかを調べる場合、生成面、つまり聴取テストや発話データを分析した研究が多いが、表記も学習者の音声知覚を知る上で重要な手がかりである。しかしながら、先行研究で日本語学習者の表記を取り扱ったものは少ない。本研究は、英語を母語とする日本語学習者による音声知覚の実態を、表記の誤用を分析することにより明らかにし、学習者にとって習得困難な日本語の音素について考察した。先行研究で特殊拍の知覚と生成の難しさは指摘されてきたが、表記においても誤用として多く見られ、中でも長音の正しい表記が一番難しいようであった。

【キーワード】 表記、音声、知覚と生成、母語干渉

1. はじめに

「大阪と京都と東京に行きました」という文を学習者に書かせた場合、すべて正しく書ける割合は低いであろう。多くは「おさか」、「きよと」、「ときよ」あるいは「とうきよ」などの長音の誤用である。このような表記に現れる誤用は中級になっても見られ、化石化している場合も多い。テストや作文の添削で何度訂正しても同じ間違いを犯す学習者のため息をついた教師も多いであろう。筆者も日頃学習者の表記に現れる誤用を目にすることが多いが、なんとなくではあるが学習者が間違いがちな音（例えば上記のような長音）に何らかの傾向があるのではないかと考えてきた。もちろん、長音の産出に関する過去の研究は数多くあり、特殊拍の聴取と発音、特に拍の長さの産出の困難さは多くの研究者が指摘してきた。「東京」の発音も、「とうきよ」と長音の長さを持続できない学習者が多い。そのような発音の誤用と、表記に現れる誤用は連動しているのではないか。発音と表記の誤用は強い相関関係があるのではないか。

学習者がどのように日本語を知覚しているのか調べる手段として、聴解テストがあるが、作文や表記という産出としても現れる。しかしながら、聴取と発音に関する研究は数多くあり、知覚と産出、つまり発音の関連性は研究されてきたが (Flege 1991; Gass 1984)、表記というもう一つの産出の形との関連性を指摘した研究は少ない。表記における誤用という観点から日本語の音声を考察した先行研究は、韓国語母語話者に限られている (姜 2006; 関 2000)。そこで、本研究は英語を母語とする日本語学習者の表記に現れる誤用に、どのような傾向があるのか考察していく。また、それがどのように彼らの発音、聞き取りと関係しているのかも考察していきたい。また、聴解の点から、どのように学習者が日本語の音素を聞いているかのヒントになるであろう。聴解の点からどのような音素が学習者にとって困難か明らかになっているが、聴解と表記との関連性が明らかになれば、表記でどのような間違いを犯すか予測でき、指導にも役立つであろう。聞き取りだけ、表記だけで誤りを見つけたらその都度注意するという場当たりの対処ではなかなか定着しない。知覚 (聴解) と産出 (表記) をまとめて包括的に指導することにより、より理解が深まり能率的に指導できるのではないだろうか。

2. 先行研究

表記に関する先行研究は、ディクテーションを用いて中上級者の文法能力を見たもの (新屋 1993; フォード丹羽 1996) や、中国人学習者による漢字表記の誤用の研究 (林 2002; 深見 1992) などがあるが、初級学習者の単語レベルでの表記を見るものは韓国語母語話者に限られ、わずかしかない。関 (2000) は、聴取と発話において難しい音声項目、特に有声子音と無声子音の区別と特殊拍は、表記においても同じように誤りが多いと報告している。姜 (2006) も、韓国人学習者に短文を書かせ、長母音の誤用について分析した。その結果、表記の誤用の実態は過去の聴取に関する調査結果と一致し、原因は母語干渉が大きいとしている。

本研究は初級の英語母語話者を対象とし、先行研究に見られるように母語干渉によって困難とされる音声項目は、表記においても誤用がみられるかどうかを考察する。では、英語母語話者が日本語を学ぶ上での母語干渉とはどのようなものがあるか。鶴谷 (2008) は、英語話者が「大阪」を /oosaka/ ではなく、/osaaka/ のように発音してしまうのは、母語である英語のアクセントルールに起因するのではないかとしている。その原因となる英語のルールとは大まかに言って次のようなものである。(1) 最後の

音節が短母音の開音節か子音一つを伴う閉音節の場合、後ろから 2 番目の音節に強勢アクセントを置く。(2) 最後の音節が長母音を含む場合、後ろから 3 番目の音節に置かれる。(3) 強勢アクセントを置かれた母音は、長く高いピッチを伴って発声される⁽¹⁾。よって「おおさか」において、日本語の高低ピッチに慣れない学習者が後ろから 2 番目の音節である/sa/に強勢アクセントを置いてしまった場合、/sa/が高く長く聞こえ、相対的にアクセントの置かれない/oo/が弱音化し、「おさーか (LHHL)」となってしまう、と説明している。以上をふまえ、鶴谷は以下が典型的な誤りの例としている (p.85)。

- 1) 高校 ko-ko (H-L)
- 2) 毎日 mai-ni-chi (L-H-L)
- 3) 図書館 to-sho-kan (L-H-L)
唐傘 kara-ka-sa (L-H-L)
- 4) 弟 o-to-to (L-H-L)

以上は、英語の母語干渉について、学習者の発音における誤用の考察だが、同一学習者の知覚による産出であれば、発話も表記も密接な関係があると推測できる。本研究では、発音だけでなく表記に関しても母語干渉による同じような誤用が見られるか、データを集め考察していきたい。

3. 方法

3.1 被験者

関西外国語大学の留学生別科に在籍中のアメリカ英語母語話者 26 名を対象にデータ収集を行った。日本語学習歴は平均 1 年で、留学生別科において上級をレベル 7 とするクラス分けのうち、レベル 2 に在籍していた。自国での日本語学習環境は様々であったが、学期開始前のプレースメントテストによりクラス分けされているので、日本語能力はある程度均一であると考えられる。

3.2 分析対象語

過去の試験や宿題などの産出データを参考に、誤用が多い拗音、促音、長音を含み、かつ被験者にとって親密度の高い語を選び分析対象語とした。さらに英語からの干渉

を考慮するため、アクセント型別に分類すると以下のようなになる。

表1 分析の対象とした語

対象語	アクセント型	含まれる特殊拍または拗音
辞書	頭高	長音
どっち	頭高	促音
京都	頭高	長音、拗音
ちょっと	頭高	促音
教科書	中高	長音、拗音
図書館	中高	拗音
宿題	平板	拗音
旅行	平板	長音、拗音
週末	平板	長音、拗音
一緒	平板	促音、拗音
東京	平板	長音

3.3 手順

分析対象語を含んだ英語の短文を計5文用意し、シートを作成した。教室に被験者を集め、シートを一枚ずつ配布し日本語に訳してもらった。制限時間は5分とし、漢字は使わずひらがなで書くように指示した。以下がその英文で、下線部が分析対象語になる。

1. Which do you prefer, Tokyo or Osaka?

訳：とうきょうと おおさかと どっちのほうが すきですか。

2. I bought things like dictionaries and textbooks.

訳：じしょや きょうかしょを かいました。

3. Shall we travel and stay in an inn this weekend.

訳：しゅうまつ、りょこうしてりょかんにとまりませんか？

4. Let's go to the library together.

訳：としょかんに いっしょに いきましょう。

5. The homework is a little hard.

訳：しゅくだいは ちょっとむずかしい。

回収後、誤答を集計し誤用をカテゴリー別に分類した。

4. 結果

ほとんどの誤用が長母音と促音に関するものであった。単なる書き間違いとの判断は難しいが、本研究では2人以上の被験者に見られた誤用を分析対象とした。パターン別に以下にまとめる。

表2 誤用のパターンと頻度

誤用の種類		頻度 (割合)
長母音の誤用	添加	73 (54%)
	脱落	30 (22%)
促音の誤用	添加	0 (0%)
	脱落	19 (14%)
	長音化	12 (9%)
計		136 (100%)

先行研究からも、英語母語話者にとって母音の長短の弁別が困難であるということが報告されているが（皆川・前川・桐谷 2002; 内田 1993）、本研究の結果も一番高い割合を占めたのが長音に関するものであった。そこで、その誤りのパターンとその原因について前述の鶴谷（2008）を参照に、母語干渉の観点から考えてみたい。

5. 考察

母音の長さを認識できないならば母音脱落が多いのではと考えられるが、実際は添加による誤用が多かった。

表3 長母音化の誤答数

単語	アクセント型	誤用例	頻度
辞書	頭高	じし <u>ょ</u>	7
教科書	中高	き <u>ょ</u> か <u>し</u> ょ	7
図書館	中高	と <u>う</u> し <u>ょ</u> かん	2
図書館	中高	とし <u>ょ</u> かん	12
宿題	平板	し <u>ゅ</u> く <u>だ</u> い	12
旅行	平板	り <u>ょ</u> こ <u>う</u>	2
一緒	平板	い <u>っ</u> し <u>ょ</u>	6

一番誤りの多かった「としょかん」であるが、/kan/が閉音節のため、後ろから2番目の/sho/に強勢アクセントを置いてしまい、さらにそれが重音節化したと考えられる。この現象は「りょこう」にもあてはまる。

しかしながら、同じく4拍で誤用の多かった「しゅくだい」の場合は、アクセントパターンの母語干渉からでは説明できない。さらに「きょかしょ」「いっしょ」「じしょ」のように、語末を伸ばしてしまう誤用も多かった。この誤用は、発話においても見られる(鶴谷 2008)。鶴谷は、この現象は英語のように軽音節での閉音節を避けるためか、各音節の重さを均一に、2モーラに整えようとするためではないかとしている。日本語もフットの単位が2モーラで、重さを均一にして発音しようとする現象は日本語母語話者にも起こる(例:電話番号の「25」を「にいごお」などと発音する)。さらに、このように語末に添加が起こり長音化するのは拗音の後続母音であることにも関係するのではないだろうか。拗音の習得の困難さは過去の研究でも指摘されているが(近藤 2012; Tsurutani 2004)、語末において、さらにその傾向が顕著になることがわかる。

次に、母音の脱落による長音の単音化を見てみよう。

表4 母音の脱落による長音の単音化

単語	アクセント型	誤用例	頻度
教科書	中高	き <u>ょ</u> か <u>し</u> ょ	4
週末	平板	し <u>ゅ</u> ま <u>つ</u>	14

長音における母音脱落は、誤用パターンは多くなく、「しゅうまつ」を「しゅまつ」とする誤用が集中した。鶴谷（2008）は、発話データより、中間言語では High-Low ピッチパターンが無標であり学習者にとって困難ではないが、逆の Low-High パターン、つまり語頭のピッチが低い initial lowering は上級者にとっても習得困難である、という調査報告をしている。本研究においても、「しゅうまつ」も「きょうかしよ」も語頭は Low-High ピッチパターンで、習得が困難と予想されるパターンである。難しいピッチ変化にあたる母音を十分に聴き取れていない可能性がある。

さらに、上記の添加と脱落が同時に起こる誤用もみられた。

表 5 母音の添加と脱落

単語	アクセント型	誤用例	頻度
教科書	中高	きよ_かし <u>ょう</u>	4
旅行	平板	り <u>ょう</u> こ	8

とくに「旅行」を「りょうこ」とする誤用が目立った。全体的な重さ（モーラ数）は認識できるものの、どこにその重さを割り当てるのかが語末の長音を認識できなかったようである。このような誤用パターンは聴取における調査 (Motohashi-Saigo 2010) でも報告されている。

次に、促音の誤用パターンを見ていきたい。

表 6 促音の脱落

単語	アクセント型	誤用例	頻度
一緒	平板	い_しよ	3
どっち	頭高	ど_ち	16

「どっち」の促音部の脱落が圧倒的に多かった。後続子音の破擦音の聞き取りの難しさもあり、どこからが後続子音が始まるか聴取が困難なのであろうか。もしくは、頭高型のアクセントのため、高ピッチを強勢アクセントのように受け取り、長さの認識を妨げたのかもしれない。

表7 促音の脱落と長音の添加

単語	アクセント型	誤用例	頻度
一緒	平板	いし <u>ょう</u>	8
どっち	頭高	ど <u>う</u> ち	2
ちょっと	頭高	ち <u>ょう</u> と	3

「いっしょ」において、上記の脱落に加えて、語末を伸ばしてしまうパターンが多かった。また、促音の閉鎖持続部分を長母音と捉える例も見られた。これも、上記の長音の誤用でも見られた、全体的なモーラ数は正しく把握できたものの、重さの割り当て誤りを起こす例ではないだろうか。

最後に、「ちょっと」は、それぞれ1人ずつだが、「ちょうつと」「ちょ__とう」「ちょつとう」「ちょうと」と誤用パターンが多く、拗音と促音の難しさを物語っている。

6. まとめ

先行研究で聴取と発話で難しいとされる点は、表記でも同じように現れた。知覚（聴取）と生成（発話）の関係は先行研究でも様々な母語話者において数多くあるが、表記という別の生成の形ももっと深く研究する必要がある。母語干渉と、聴取の誤用パターンから、表記のミスはある程度予測できる。このような誤用が多い音声項目は、聞き取りや発音だけでなく、表記においても注意して指導すべきである。難しい音声項目は一つの技能だけで指導するのではなく、多角的に注意喚起すれば、相互作用でそれぞれの技能の向上に役立つであろう。

今後は、さらに同一の学習者から聴取、発話、表記のデータを収集しその関連性について、詳しく調べていく必要がある。実際に聴取が弱い学生は、表記にも誤用が多いのか、発音が悪い学生は表記も同じ誤用があるのか、など考察していきたい。

注

(1) 詳細は Cruttenden (1986)、Griegerich (1992) を参照。

参考文献

内田照久 (1993) 「中国人日本語学習者における長音と促音の聴覚的認知の特徴」『教

- 育心理学研究』第 41 号 4 卷 pp. 414-423
- 姜枝延 (2006) 「韓国人学習者の日本語の文字表記に見られる音声項目の誤用」『杏林大学大学院国際協力研究科大学院論文集』第 3 号 pp. 23-34
- 近藤真理子 (2012) 「日本語学習者の音声習得における第一言語特有の干渉と普遍言語的干渉 - 日本語教師へのアンケート調査から -」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 57 号 pp.21-34
- 新屋映子 (1993) 「日本語中上級学習者の聴解能力について」『日本語教育』第 79 号 pp.126-136
- 鶴谷千春 (2008) 『第二言語としての日本語の発音とリズム』溪水社
- 林玉恵 (2002) 「字形の誤用からみた日中同形語の干渉及びその対策 - 台湾人日本語学習者を中心に」『日本語教育』第 112 号 pp. 45-54.
- フォード丹羽順子 (1996) 「日本語学習者による聴解ディクテーションに現れた誤りの分析: 文法および音声的側面に焦点を当てて」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第 11 号 pp.21-40
- 深見兼孝 (1992) 「中・上級日本語学習者の漢字表記上の問題について」『広島大学留学生センター紀要』第 2 号 pp. 22-33
- 皆川泰代 (2002) 「日本語学習者の長/短母音の同定におけるピッチ型と音節位置の効果」『音声研究』第 6 号 2 巻 pp. 88-97
- 関光準 (2000) 「韓国人学習者の日本語作文に見られる母語音声の干渉」『平成 11-12 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2) 研究成果報告書 日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』 pp.51-60
- Cruttenden, A. (1986). *Intonation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Flege, J. (1991). Perception and production: The relevance of phonetic input to second language phonological learning. In T. Huebner & C. Ferguson (Eds.), *Crosscurrents in second language acquisition and linguistic theories*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gass, S. (1984). Development of speech perception and speech production abilities in adult second language learners. *Applied Psycholinguistics*, 5, 51-74.
- Giegerich, H. J. (1992). *English Phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tsurutani, C. (2004). Acquisition of Yo-on (Japanese contracted sounds) in L1 and L2 phonology in Japanese Second Language Acquisition. *Journal of Second Language*, 3, 27-48.

Motohashi-Saigo, M. & Hardison, M. (2010). Development of perception of second language Japanese geminates: Role of duration, sonority, and segmentation strategy. *Applied Psycholinguistics*, 31, 81-99.

(motohash@kansaidai.ac.jp)